

小学校の外国語教育の在り方に関する研究

平成29年告示の新学習指導要領では、小学校中学年から外国語活動を、高学年から外国語科を導入することとなった。そこで、新学習指導要領の趣旨を踏まえ、小学校外国語活動の指導及び外国語科の指導と評価の在り方に関する研究を行った。4名の研究協力委員が、所属校において中学年学級担任による授業づくり、高学年での Small Talk やパフォーマンス評価に取り組んだ。また、学級担任や専科指導教員による指導と評価の一体化に向けた取組として、「CAN-DO リスト」の形で学習到達目標やルーブリックを活用した評価を試みた。

＜検索用キーワード＞ 小学校外国語科、学級担任、専科指導教員、Small Talk、CAN-DOリスト、パフォーマンス評価

研究協議会顧問

愛知県立大学外国語学部教授 池田 周

研究協議会委員

稲沢市立大里東小学校教諭	鈴木 啓太(平成30, 令和元年度)
春日井市立西山小学校教諭	高橋 健太(平成30, 令和元年度)
常滑市立小鈴谷小学校教諭	加藤 真治(平成30, 令和元年度)
碧南市立日進小学校教諭	成澤 美紀(平成30, 令和元年度)
総合教育センター研究指導主事	広瀬八重子(平成30年度主務者, 令和元年度)
総合教育センター研究指導主事	山崎洋一郎(平成30, 令和元年度)
総合教育センター研究指導主事	小川 雅美(平成30年度, 令和元年度主務者)

1 はじめに

SNS等の普及や訪日外国人観光客の増加、東京オリンピック・パラリンピック開催決定などにより、世界を身近に感じる機会が急増している。このようにグローバル化が急速に進展する中で、外国語によるコミュニケーション能力は、これまでのように一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたるさまざまな場面で必要とされるだろう。小学校では、平成23年度から高学年において外国語活動が導入され、その充実により、児童の高い学習意欲、中学校の生徒の外国語教育に対する積極性の向上といった成果が認められている。一方、課題として、中学校段階で音声から文字への学習が円滑に接続されていないことや、抽象的な思考力が高まる段階である高学年児童には、より体系的な学習が求められることなどが指摘されている。こうした成果と課題から、新学習指導要領（平成29年3月告示）では、小学校中学年から「聞くこと」「話すこと」を中心とした外国語活動を導入し、高学年から段階的に文字を「読むこと」「書くこと」を加えて統合的・系統的に扱う教科学習を行うこととなった。令和2年度から全面実施の新学習指導要領に円滑に移行するために、移行期間は外国語活動の授業時数が、中学年においては15～35単位時間、高学年においては50～70単位時間となったが、授業時数・ALT指導時数・専科指導教員配置数など、その実施状況は各市町村・各学校によってさまざまである。

2 研究の目的

新学習指導要領の趣旨を踏まえ、小学校外国語活動の指導及び外国語科の指導と評価の在り方に関する調査研究を進めることにより、各学校における外国語教育の充実に資する。

3 研究の方法

(1) 移行期間における各地域や各学校での外国語教育の取組についての実態把握と課題の明確化

所属校でさまざまな立場にある研究協力委員が、移行期間における外国語活動の取組について情報交換を行い、新学習指導要領で目指す資質・能力の育成に向けた授業改善の課題を明らかにする。

(2) 新学習指導要領全面実施に向けた指導と評価の在り方に関する実践に基づく協議

各研究協力委員が所属校において、新学習指導要領のねらいの実現に向けた授業を実践し、指導と評価の在り方について研究協議する。

4 研究の内容

(1) 中学年の学級担任による授業づくりの実践（碧南市立日進小学校 4年生担任）

移行期間における碧南市立日進小学校の中学年の外国語活動は、学級担任とALTで年間15単位時間を実施している。しかし、令和2年度から授業時数が35単位時間に増加するため、外国語活動の全ての時間にALTが配置されるとは限らない。そこで、令和元年度の4年生では、学級担任のみの授業を設定した単元（Let's Try! 2, Unit 5 「Do you have a pen?」）を計画し、実践を行った。

新学習指導要領の目標に「言語活動を通してコミュニケーションを図る素地となる資質・能力を育成する」とある。児童の興味や実態を熟知する学級担任が、児童にとって身近な話題を取り上げた言語活動を設定することで、児童は自分のことを伝えたり、友達のことを知ったりする楽しさを味わうことができた。教師やALT主導の歌やゲームを中心とした活動と違い、最初は何をどのように伝えるか戸惑う児童もいたが、随時、学級担任が活動計画の修正や児童の個別支援を行うことで、児童は「分かる」「できる」という達成感を味わいながら、単元の学習を進めることができた。

また、授業の最後に児童が振り返りを記述している時間を利用し、学級担任が児童と簡単なやり取りを行い、本時における児童の理解や定着を見取る活動（グッバイチャレンジ）を行った。学級担任が児童一人ずつに質問し、児童は自分のことについて“*Yes, I do. /No, I don't.*”で答えるものである。学級担任は全体やペアの活動では十分に見取れなかった個の様子を把握することができ、授業改善に生かすことができた。

(2) 高学年のSmall Talkの実践（稲沢市立大里東小学校 5年生担任）

移行期間における稲沢市立大里東小学校の外国語活動の授業時数は、中学年35単位時間、高学年70単位時間である。高学年で位置付けられている、身近な話題について教師と児童や児童同士がやり取りする言語活動Small Talkと豊かな表現を支える語彙習得のための帯活動の実践に取り組んだ。帯活動については、授業の始めに「ルーティン学習」として3～6年生で行った。

5年生のSmall Talkでは、まず学級担任がALTとやり取りをすることで、会話の内容を理解するだけでなく、答え方や聞き手の反応の仕方のイメージを児童がもてるようにした。また、国語科の学習で考えた会話を続けるポイントを「Small Talkのポイント」として教室に掲示し、外国語活動の学習につなげるなど、他教科との関連も図った。さらに、Small Talkで使える語彙を増やすことで、児童が自分のことを伝えることができたことより実感できるように、「ルーティン学習」において、音声で慣れ親しんだ既習の語彙や表現を児童が反復練習する活動を行った。単調なドリル学習にならないよう、ゲーム的な要素を取り入れたペア活動とすることで、児童が楽しみながら取り組むだけでなく、児童同士の教え合いの姿も見られた。最初は、活動名を「すらすら英単語」とし、ワークシートには

「①りんご」「①apple」と、日本語と英単語を記していた。この場合、小学校外国語科「読むこと」の目標では求められてない英単語の文字を見て読む力が必要となる。そこで、児童が日本語を介さずイメージから英語の語彙を習得することが重要と考え、活動名を「Picture English」と変え、イラストに文字（小学校外国語活動教材「We Can !」使用フォント）を添えたワークシートに改善した。

平成31年3月に児童に行ったアンケートでは、「4月と比べて、先生の言っていることが分かったり、話せたりするようになったと思うか」との質問に、32人中27人の児童が「とても話せるようになった」「話せるようになった」と回答した。このことからSmall Talkと「Picture English」に継続して取り組むことで、英語を聞いたり英語でやり取りしたりする力が付いたことを、教師だけでなく児童自身も実感できたことが分かった。

(3) 指導と評価の一体化に向けた取組

ア 年間及び単元・授業ごとの学習到達目標の活用（常滑市立小鈴谷小学校 6年生担任）

移行期間における常滑市立小鈴谷小学校の高学年の外国語活動は、学級担任とALTで17単位時間、学級担任のみで33単位時間行っている。令和2年度からの教科化に向け、外国語の学習を通して何ができるようになるかを、児童が見通しをもって活動できる授業づくりに取り組んだ。まず、愛知県教育委員会作成の「My English Passport」を参考に「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標を作成した。このリストを基に設定した単元ごとの目標を児童と共有し学習を進めていくことで、児童も目標に照らして毎時間の学習を具体的に振り返ることができた。できるようになったことや不十分なことを記した児童の記述から、教師は手だての有効性を毎時間確認しながら、授業改善に取り組むことができた。

6年生We Can ! 2, Unit 3「He is famous. She is great.」（4時間完了）では、活動の様子や振り返りの記述による日々の見取りとともに、「話すこと〔発表〕」に関するパフォーマンス評価を実施した。単元末に「Who am I?クイズ」を児童全員の前で発表し、パフォーマンステストをすることを事前に伝えた。1時間目は「プロフィールを紹介する映像を見る」、2時間目は「英語の文の語順のきまりを知る」、3時間目は「友達を紹介する文を考える」といった単元末のパフォーマンステストにつながる活動や、発表に向けた練習となる活動を段階的に設定した。単元末の児童の自己評価シートには、「上手に友達の紹介が言えたので、とてもいい経験になった」「たくさんの人の前で、友達の紹介を大きな声で発表できた。また、クイズを聞くときもたくさん聞き取れて、答えることができた」と目標を意識した記述が見られた。

このように年間及び単元・授業ごとの学習到達目標を設定し、児童と共有することで、何ができるようになるかを教師も児童も明確にして学習を進めることができた。さらに、児童の様子や振り返りの記述から学習到達状況を見取り、次時の手だてを見直すことで、児童とともに授業づくりに取り組むことができた。教師が実感することができた。

イ 「話すこと〔やり取り〕〔発表〕」の評価の試み（春日井市立西山小学校 専科指導教員）

専科指導教員は、同中学校区内の小学校3校で3～6年生の28学級の指導に当たっている。「話すこと〔やり取り〕〔発表〕」の評価の試みの一つとして、パフォーマンス評価の実践に取り組んだ。5年生We Can ! 1, Unit 4「What time do you get up?」（5時間完了）では「話すこと〔発表〕」のパフォーマンステストを行った。家庭科で行った一日の生活時間の使い方を調べた活動と関連付け、一日の生活についてのスピーチを単元末に行うこととした。第4時にルーブリックを児童に示すことで、児童は発表に向けて意欲が高まるとともに、具体的な目標をもって活動や練習に取り組むことができた。また、何をどのように評価するかを具体的に表現することで、専科指導教員はこの単元で身に付けさせたい力を明確にして、学習計画を作成することができた。

作成したルーブリックをALTとも共有することで、ALTによる活動やモデル提示が評価の観点

や基準をより意識したものになった。また、実践後、ルーブリックを見せた学級担任からは、ルーブリックがあることで外国語科の評価に対する不安が軽減されるとの感想があった。

5 研究のまとめと今後の課題

小学校外国語科導入に向けた移行期間における研究協力委員の所属校における実践を通して、次のことが確認された。

- ・新学習指導要領の目指す資質・能力の育成を目指した言語活動を行っていくには、児童の実態に応じた指導計画の作成や修正、個への支援が必要である。そのためには、学級担任が積極的に授業づくりに関わることが重要である。
- ・高学年で設定されているSmall Talkについては、既習事項の復習や定着を図る活動と併せて、段階的に取り組むことで、児童の「話すこと〔やり取り〕」の力を育成することができる。また、英語で伝え合う言語活動を継続的に設定することで、「自分のことを伝えられるようになった」という成長を児童自身が実感することができる。
- ・「CAN-DOリスト」の形で設定した年間及び単元・授業ごとの学習到達目標を児童と共有しながら段階的に指導していくことで、児童は見通しをもって学習に取り組み、主体的な学びを生む。さらに、指導者が学習到達目標に沿って児童の理解や定着の程度を見取することで、自身の指導を振り返り、授業改善に向けたPDCAサイクルを構築することができる。
- ・パフォーマンス評価をはじめとする評価方法については今後も検討を重ね、小学校外国語科で身に付けさせたい力を明確にした上で、指導と評価の一体化を図っていく必要がある。

次年度から、小学校の外国語科がスタートする。移行期間における実践を通して明らかとなったことを生かし、「外国語を使って何ができるようになるか」を具体的にした授業づくりに取り組み、指導と評価の一体化に向けた研究を重ねていきたい。

参考文献等

- 文部科学省（2019）『小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編』
- 文部科学省（2017）『小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック』
- 文部科学省（2013）『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標設定のための手引き』
- 愛知県教育委員会（2013）『「グローバル化に対応した新たな英語教育の在り方」リーフレット』